

国立国語研究所学術情報リポジトリ

How dialectal speakers perceive tonal patterns :
An experiment conducted near a toneless area of
the Kantô Plain

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 亮一, SATO, Ryôichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001768

曖昧アクセント地域における 話者の型意識について

—「比較発音による調査」から—

佐藤 亮 一

一 調査の目的・方法

I 目的

多型アクセントと無アクセント（一型アクセント）とが接触する地域では、同一個人が同一単語を種々の相に発音する傾向がいちじるしい。そのような地域のアクセントは「曖昧アクセント」と呼ばれることがあるが、その一つである埼玉県北東部から隣接する茨城県西部にかけて、筆者はかつてアクセントのゆれと調査法との関連について考察し報告した（『国語学研究』10・アクセント調査法についての一実験・1970年）。その後、同地域で話者の型意識を探ることを目的としていくつかの方法による調査を試みたが、ここでは、そのうちの「比較発音による調査」の結果を報告する（なお、この地域のアクセントの分布については、金田一春彦「関東地方に於けるアクセントの分布」1942年や、秋永一枝・金井英雄・佐藤亮一共同執筆「利根川上・中流域のアクセント」1971年などを参照されたい）。

ここでいう「比較発音による調査」とは、2語（たとえば「鼻が」と「花が」・「首が」と「爪が」・「首が」と「空が」など）を併記したカードを話者に読ませ、2語のアクセント相の異同について観察し、さらにアクセントの異同について話者の発言を求めるものである。この方法はアクセントのゆれが認められる語について、その型所属を決めようとする場合や、無アクセント化の傾向がいちじるしい話者のアクセントが果して完全な無アクセントなのか、それとも型の区別を認めうる曖昧アクセントなのかを判断しようとするときなどに採られることがあるようだが、今回はとくに次の点に留意して調査を行なった。

1) 2語に型の対立と認めうるアクセント相の違い（たとえば、[クビガ]と

〔ソラガ〕が現われたとき、発音順序を変えた場合（たとえば、1回めは「首が・空が」、2回めは「空が・首が」）はどうなるか。

- 2) 組み合わせの相手の語を変えた場合はどうか。
- 3) 発音回数を増やせばどうなるか。
- 4) 話者が発音した音相と、その発音についての話者の発言（型意識）とはどう対応するか。

II 話者

数人の話者について調査したが、ここでは、ゆれの様相が互いにかなり異なる次の二人の話者について述べる。

A話者 横島敬子（1954年生まれ・女）茨城県猿島郡五霞村小福田（よその土地での生活経歴なし・父は上記地点生まれ、母は埼玉県北埼玉郡大利根町原道生まれ）

B話者 秋間直美（1951年生まれ・男）埼玉県北埼玉郡大利根町道目（よその土地での生活経歴なし・父は上記地点生まれ、母は埼玉県加須市馬内生まれ）

III 調査語

2拍名詞14語（飴・釜・首*・爪・鼻*・夏*・橋*・花・胸・雨*・鎌・空*・箸・船）。ただし、主として*の6語について調査することをねらいとし、他の語は組み合わせの相手として加えた。

IV 調査単位

- (1) 名詞単独（例「鼻」）
- (2) 格助詞「が」のついた文節（例「鼻が」）
- (3) 格助詞「が」のついた文節で始まる短文（例「鼻が高い」）

ただし、ここでは、主として(3)の短文の単位で調査した結果について述べる。なお、(3)に用いた短文は次のとおり。

・飴が甘い・釜がある・首が長い・爪が伸びる・鼻が高い・夏が来た・橋が見える・花が咲く・胸が痛い・雨が降る・鎌が切れる・空が晴れる・箸が折れる・船が見える

V 「比較発音」における組み合わせ

- ① { 飴 } ② { 釜 } ③ { 鼻 } ④ { 橋 } ⑤ { 鼻 } ⑥ { 鼻 } ⑦ { 鼻 } ⑧ { 橋 } ⑨ { 橋 } ⑩ { 橋 }
- { 雨 } { 鎌 } { 花 } { 箸 } { 首 } { 夏 } { 空 } { 首 } { 夏 } { 空 }

⑪ { 雨 / 首 } ⑫ { 雨 / 夏 } ⑬ { 雨 / 空 } ⑭ { 首 / 爪 } ⑮ { 首 / 夏 } ⑯ { 首 / 空 } ⑰ { 夏 / 胸 } ⑱ { 夏 / 空 } ⑲ { 空 / 船 } 以上19組

VI アクセントの記録・表記

話者の発音はすべて録音し、それを何度も聴いて、それぞれの音のアクセント相を判断・表記した。アクセントの表記にあたっては、主として、次の点に留意した。

- (1) あがりめ・さがりめの有無および位置
- (2) その際の高低差の程度

(1)に関しては音節間の上昇または下降をとらえ、また、下降に関しては原則として最初のさがりめの位置のみを表記する。たとえば「雨が降る」を発話したとき、「ア」と「メ」の間に下降が認められれば〔ア¹メガ〜〕と表示し、その際の「メ」と「ガ」の間下降は原則として表示しない。(2)に関しては、音節間の高低差の程度に応じて、次のような三段階の表示をとる。

- あがりめ大 (↑) ・さがりめ大 (↓)
 あがりめ中 (↗) ・さがりめ中 (↘)
 あがりめ小 (ˆ) ・さがりめ小 (˘)

以上の表記法は聴覚音声学的な表記としてもかなり粗いもので、より精密な表記（たとえば「語アクセントの地理的分布をめぐって」—高田誠ほか・第16回日本方言研究会—で用いられている五点式表記法など）を心がけることが望ましいが、ここでは、他の資料（前述の「アクセント調査法についての一実験」）との比較の必要もあって、このレベルの表示にとどめた。

二 調査結果

I A話者の「比較発音」

前述の「アクセント調査法についての一実験」に報告した内容の一部から引用するが、名詞に格助詞「が」をつけた文節で始まる短文（文例は「比較発音」で用いたものと同じもの）を列記した調査票を読ませる調査（文の配列を変えた数種類の調査票を用意し、同一調査語について数回の発音を得ようとしたもの）で、この話者が発音した、それぞれの語のアクセント相は次のとおりである（括弧内の数字は発音回数を、また、▽は助詞部分を示す）。

- 「飴が～」 ○○▽ (1), ○^フ○▽ (1), ○^フ○^ニ▽ (1), ○○^ニ▽ (1)
「釜が～」 ○○▽ (1), ○^フ○^ニ▽ (1), ○^ニ○▽ (2)
「首が～」 ○○▽ (3), ○^フ○▽ (1)
「爪が～」 ○○▽ (3), ○^フ○▽ (1)
「鼻が～」 ○○▽ (2), ○^フ○▽ (1) ○^フ○^ニ▽ (1)
「夏が～」 ○^フ○^ニ▽ (4)
「橋が～」 ○^フ○^ニ▽ (4)
「花が～」 ○^フ○^ニ▽ (4)
「胸が～」 ○^フ○^ニ▽ (4)
「雨が～」 ○○▽ (1), ○^ニ○▽ (3)
「鎌が～」 ○○▽ (1), ○^フ○^ニ▽ (1), ○^ニ○▽ (2)
「空が～」 ○○^ニ▽ (1), ○^フ○^ニ▽ (2), ○^ニ○▽ (2)
「箸が～」 ○^ニ○▽ (4)
「船が～」 ○○^ニ▽ (1), ○^ニ○▽ (1), ○^ニ○▽ (2)

以上のように、数回の発音を通じて音相の違いが認められる語と音相が安定している語とが存在するが、仮に、音相が安定している語、および、音相の違いが認められても、それが一つの型の音声学的変種と解釈しうる語について、それぞれの語の型所属を求めれば次のようになる。

- ▽型 「首が」「爪が」
○^ニ○▽型 「夏が」「橋が」「花が」「胸が」
○^ニ○▽型 「箸が」

上記の語のほか、[○^フ○^ニ▽] [○○^ニ▽] [○^フ○^ニ▽] を○○▽型の音声学的変種と認めて、「飴が」と「鼻が」を○○▽型とする観方もある。

「釜が」「雨が」「鎌が」「空が」「船が」の語はゆれの幅が大きく、この材料だけではそれぞれの型所属を決めることができない。

次に、2語の「比較発音による調査」でこの話者が発音したアクセント相を表1に示す。表1は「短文」の単位で調査した結果であるが、その発音順序は、まずそれぞれの組み合わせごとにカードに記したもの(例1)計19組を、それぞれのカードについて2回ずつ読ませ(その結果を「1回」「2回」の欄に示した)、次に語順を逆に記したカード(例2)を2回ずつ読ませた(その結果を「逆1回」「逆2回」の欄に示した)ものである(B話者の発音結果を示す表2の場合も同じ)。

表1 (A 話者)

	調査語	1 回	2 回	逆1回	逆2回
①	飴が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	雨が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
②	釜が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	鎌が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
③	鼻が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	花が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
④	橋が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	箸が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑤	鼻が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	首が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○ ^フ ▽
⑥	鼻が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ^フ ▽
	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
⑦	鼻が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	空が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑧	橋が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	首が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
⑨	橋が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
⑩	橋が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	空が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑪	雨が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
	首が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○ ^フ ▽	○ ^フ ○▽
⑫	雨が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
⑬	雨が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
	空が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑭	首が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	爪が～	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○ ^フ ▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
⑮	首が～	○ ○ ^フ ▽	○ ○ ^フ ▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
⑯	首が～	○ ○ ^フ ▽	○ ○ ^フ ▽	○ ^フ ○▽	○ ^フ ○▽
	空が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑰	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	胸が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
⑱	夏が～	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽	○ ^フ ○ ¹ ▽
	空が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
⑲	空が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽
	船が～	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽	○ ¹ ○▽

例1

飴が甘い
雨が降る

例2

雨が降る
飴が甘い

表1をみると、単語（を含む短文）を列記した調査票を読ませたときに較べて、それぞれの語の音相のゆれがいちじるしく減少していることがわかる。これは、「比較発音」では、単語（を含む短文）を列記した調査票を読ませたときよりも、話者がそれぞれの型を内省する度合が大きいこと、また、それぞれの語の型の特徴をきわだたせようとする意識がより大きく働いたためではないかと思われる。金田一春彦氏の「丁寧な発音」における音相や平山輝男氏の「反省的型」に近いものがここに現われているとみることもできよう。

表1のうち、①②③④⑥⑦⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑯の組み合わせでは、4回の発音を通じて2語間に型の対立と認めうる一定の音相の差が現われており、この段階で型を求めるならば、「飴が」「釜が」「首が」「鼻が」は〇〇▽型、「橋が」「花が」「夏が」は〇〇▽型、「雨が」「鎌が」「空が」「箸が」は〇▽型と解釈しうる（⑩の「首が」の〔〇▽〇▽〕、⑬の「首が」の〔〇〇▽〕などは助詞卓立のイントネーションと考え、⑥の「鼻が」の〔〇▽〇▽〕〔〇▽〇▽〕は、その他の語にみられる〔〇〇▽〕〔〇▽〇▽〕とともに、〇〇▽型の音声学的変種と認める）。

また、⑤⑭⑰⑱の組み合わせを2語が同じ型に発音された例と認めると、「首が」「鼻が」が〇〇▽型、「夏が」が〇〇▽型、「空が」が〇▽型である点が上記の結果と同じであり、さらに「爪が」が〇〇▽型、「胸が」が〇〇▽型、「船が」が〇▽型となる。

以上、単語（を含む短文）を列記した調査票を読ませたときには型所属を決めることができなかった「釜が」「雨が」「鎌が」「空が」「船が」の語についても、4回の「比較発音」からは、一応それぞれの型を求めることができた。

ところで、ある組み合わせでは一定の型と認めうる音相が現われていても、他の組み合わせでは一つの型の音声学的変種の範囲を越えるゆれが生ずる語がある。すなわち、「空が」の語は⑦⑩⑬⑱からは〇▽型と認定されるが、⑬では〔〇▽〇▽〕と〔〇▽〇▽〕とにゆれており、また「夏が」の語は⑥⑱

⑬⑭⑮からは〇〇⁷▽型と認定されるが、⑨では〔〇¹〇¹▽〕と〔〇¹〇¹▽〕とにゆれている。このことは、曖昧アクセントの地点では、「単語（語単独・文節・短文などの単位で）を列記した票を読ませる調査」ではもちろんのこと、「比較発音による調査」でもゆれが生ずる場合があることを示しており、このような地点でのそれぞれの語の型所属の認定にあたっては、さらに慎重な配慮が必要であると言えよう。この調査では、それぞれの組み合わせについて4回ずつ発音させたわけであるが、その限りではゆれが認められない組み合わせについても、さらに発音回数を増やせばゆれが生ずる可能性も当然予想される。一方、この話者が、「比較発音」の際に「空が」はおおむね〇⁷〇¹▽型と認めうる音相に、「夏が」はおおむね〇〇⁷▽型と認めうる音相に発音しているということも、話者のアクセント意識を探る材料として重要な事実である。

II B話者の「比較発音」

B話者の「比較発音による調査」の結果を表2に示す。表2のうち、4回の発音を通じて2語間に型の対立と認めうる一定の音相の差が現われている組み合わせは⑥⑦⑨⑬⑮であり、それぞれの語の型は、「首が」「橋が」「鼻が」が〇〇▽型、「夏が」が〇〇⁷▽型、「空が」が〇⁷〇¹▽型と認定される。

また、⑤⑬⑭の組み合わせは2語が同じ型に発音された例と認めると、「首が」「鼻が」が〇〇▽型、「夏が」が〇〇⁷▽型となる点が上記と同じであるほか、〇〇▽型に「爪が」、〇〇⁷▽型に「胸が」の語が加わる。

さらに、①③⑧⑩⑫⑮⑱の組み合わせでは、2語のうち一方の語が、一定の音相、または音相に差があってもそれが一つの型の音声学的変種と認めうる範囲内にあり、このケースについてもそれぞれの語の型を求めれば、「首が」「橋が」「空が」が〇〇▽型、「花が」「夏が」「雨が」が〇〇⁷▽となる。

以上のうち、「空が」の語は⑦⑮からは〇⁷〇¹▽型、⑱からは〇〇▽型となり、これも、先にA話者について触れたように、「比較発音」により語の型所属を決めるやりかたに限界があることを示している。

次に、4回の発音中（一つの型の音声学的変種の範囲を越える）ゆれが認められる①②③④⑤⑩⑪⑫⑬⑮⑱の組み合わせについてみると、ゆれが認められる語は、「飴が」①、「釜が」②、「鼻が」③、「橋が」④⑧、「雨が」⑪⑫⑬、

表2 (B 話者)

	調 査 語	1 回	2 回	逆 1 回	逆 2 回
①	飴 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	雨 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
②	釜 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	鎌 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
③	鼻 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	花 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
④	橋 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	箸 が～	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑤	鼻 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑥	鼻 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑦	鼻 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	空 が～	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ^f ▽	○ ¹ ○ ^f ▽
⑧	橋 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑨	橋 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑩	橋 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	空 が～	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑪	雨 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽
	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑫	雨 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽
	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑬	雨 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽
	空 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑭	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	爪 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑮	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑯	首 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	空 が～	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽
⑰	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	胸 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑱	夏 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	空 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
⑲	空 が～	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽
	船 が～	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ¹ ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽	○ ^f ○ ¹ ▽

「鎌が」②, 「空が」⑩⑬⑱, 「箸が」④, 「船が」⑱(数字は組み合わせ番号)
であって、このうち、「鼻が」「橋が」「雨が」「空が」の語は、先に記したように、他の組み合わせでは4回の発音を通じてゆれが認められない場合がある。

ゆれの多少についてA話者とB話者とを比較すると、19組中ゆれが認められる組み合わせ数は、A話者が2組であるのに対してB話者が11組であって、両者に大きな差がみられる。これは、B話者がA話者よりも型意識が曖昧化している語が多いことを意味すると考えたい。ところで、注意すべきは、型意識が明瞭な多型アクセントだけではなく、型意識の無い無アクセントでも、「比較発音」では話者の音相のゆれが少ない(ここでは具体的な資料を提示しないが、二拍名詞に一拍の助詞をつけた単位では[○○'▽]ないし[○'○'▽]的な相に安定する傾向がある。また、「比較発音」の調査を筆者はしていないが、宮崎県都城のような型意識を有する尾高一型アクセントでも、おそらく[○○'▽]的な相に安定する傾向が強いと予想される)のであって、このことから、型意識が曖昧なアクセントの特色の一つは、(型意識が明瞭な多型アクセントや尾高一型アクセント、型意識の無い無アクセントの両方に対立して)現象的には調査時におけるゆれが大きいところに求められそうに思われるが、この点については、なお考えたい(ここでは「比較発音」による結果についてみたわけであるが、「自然談話」におけるゆれの現われかたについても調査したい)。

4回の発音を通してみると、ゆれが認められる組み合わせのうち、③④⑧⑩では1・2回めの発音と逆1・2回めの発音のいずれか一方では型の区別と認めうる音相の差が現われているが、他方ではその区別が失われる。たとえば、④では1・2回めの発音からは「橋が」が○○▽型、「箸が」が○'○▽型と認定されるが、逆1・2回めの発音では両語とも[○'○'▽]になり型の区別が消える。

また、⑩では、1・2回めの発音からは「雨が」が○○'▽型、「首が」が○○▽型と認定されるが、逆1・2回めの発音からは、「首が」の型は変わらないが「雨が」は○'○▽型になる。②では、1・2回めの発音は「釜が」「鎌が」とも[○'○'▽]であるが、逆1・2回めには両語とも[○'○▽]になる。

以上のように、同一の組み合わせでも発音順序を変えるとアクセント相が変わる傾向がみられることから、ゆれの様相を「比較発音」によってみようとするときには、発音回数を増やすこと、組み合わせの相手の語を変えてみるもののほかに、同一組み合わせ内で発音順序を変えてみることも必要であると思われる。ゆれが認められるとき、調査者のアクセント観によってゆれの中のある部分だけを採りあげてその語の型所属を決めることももちろん可能であるし、また、ある一つの調査法を採ってその結果だけで型を求めるやりかたも広く行なわれているが、一方、方言アクセントの記述は、ゆれがみられる語についてもその型所属を決め、あるいは、ゆれがみられる語とゆれがみられない語の両方があるときにもっぱら後者に注目し、その地点のアクセント体系をより整然とした姿で求めるところのみ目標を置くべきではないと考える。調査法をいろいろ変えてみてことさらにゆれを引き出すことの意味は、その結果、地点もしくは話者により、あるいは同一話者でも語によってゆれの傾向に差が認められれば、その背後にある地点間のアクセントの性格、話者間のアクセント意識の違いについて考察することが可能となるところにある。

以上、それぞれの組み合わせごとに、それぞれの語のゆれの有無、様相について考察した。次に、組み合わせの相手の語が何であるかという点を無視し、それぞれの語の発音全例（のべ発音例）について、そのゆれの様相を表3にみよう。

発音回数が少ない「飴が」「釜が」「爪が」「花が」「胸が」「鎌が」「箸が」「船が」の語は比較の対象として不適当なので除き、「首が」「鼻が」「橋が」「夏が」「雨が」「空が」の語についてみると、これらのうち「首が」は〔〇〇▽〕（1回）と〔〇^フ〇▽〕（23回）の相だけであり、〇〇▽型として安定していると認められるし、「夏が」は〔〇^フ〇[↑]▽〕（2回）と〔〇^フ〇[↑]▽〕（22回）の相だけであって、〇〇[↑]▽型として安定していると認められる。これに対して「鼻が」と「橋が」には〇〇▽型的な発音と〇〇[↑]▽型的な発音の両方が見られるが、その比率は〇〇▽型的な発音の方が大きい。「雨が」には〇〇[↑]▽型的な発音と〇[↑]〇▽型的な発音の両方がみられ、「空が」には〇〇▽型的、〇〇[↑]▽型的、〇[↑]〇▽型的な発音がみられるが、この2語については、ある型がとくに多く

表 3 (B話者)

	○○▽	○ [↑] ○▽	○ [↑] ○ [↑] ▽	○ [↑] ○ [↑] ▽	○ [↑] ○ [↑] ▽	○○ [↑] ▽	○ [↑] ○▽	○ [↑] ○▽	○ [↑] ○ [↑] ▽	のべ発音回数
飴が～		3			1					4
釜が～		2			2					4
首が～	1	23								24
爪が～		4								4
鼻が～	1	13			2					16
夏が～				2	22					24
橋が～		12			4					16
花が～					4					4
胸が～					4					4
雨が～					9	1		6		16
鎌が～		2			2					4
空が～		12			2			8	2	24
箆が～					2			2		4
船が～		1	1				2			4

発音される傾向は認められない（ただし、「空が」の○○[↑]▽型的な発音は少ない）。

以上のように、発音全例についてそれぞれの語のゆれの様相をみると、語によって、ゆれが大きいものと小さいものがあることがわかる。これは型意識の明瞭度・曖昧度（ある語がある型であると意識されるとき、その意識の強弱の度合、安定度）が語によって異なっていることの反映であると考えたい。また、今回の限られた材料についてだけ言えることであるが、このB話者は○○▽型および○○[↑]▽型として安定している語はもっている（それぞれ「首が」と「夏が」の1語ずつのべ発音数が4回以下のものは除いて）が、○[↑]○▽型としての安定語は認められない。もし調査語を大幅に増やし、また二拍名詞プラス一拍の助詞の単位だけでなく三拍名詞単独（助詞なし）の単位のものも調査したとき、やはり上記の傾向が認められるならば、この話者の三拍単位のアクセントについては○○○型と○○[↑]○型の二つを認め、○[↑]○○型は認め

ないという解釈もありえよう。これは、曖昧アクセント地点についても一定の手続きによって多型アクセントとしての体系を引き出すことが可能であることを意味するが、一方、それぞれの語のゆれの傾向や、その裏にある話者のアクセント意識に注目することによって、同じ体系と認められるアクセントの中の質的な違いを引き出すことの可能性をも重視すべきであると考え。

なお、ゆれが認められる語について、同一地点の他の話者や隣接地点(地域)の話者についても調査し、ゆれの傾向に地域性が認められるかどうか検討することや、ゆれのいちじるしい地点についてアクセント体系を立てるときのゆれの処理原則などについては、今後の問題点として考えていきたい。

Ⅲ 「比較発音」の際の話者の発言

短文の単位で調査したときは省略したが、名詞単独および文節(言いきり)の単位で調査したとき、それぞれの組み合わせについて、2回の「比較発音」の直後、話者に「その二つのことばは、アクセント、つまりことばのふしは同じですか、違いますか。」という質問をこころみた。その際の話者の発言については種々の興味ある事実がみられたが、ここでは紙数の都合で、そのごく一部に触れるにとどめる。

A話者の場合は実際の発音にみられる2語のアクセント相の区別の有無と一致する発言がほとんどであった。たとえば、③の「鼻が。」「花が。」をそれぞれ〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(1・2回めとも)と発音したときには、「この二つはアクセントが違う」と言い、「どう違いますか」という調査者の質問には「<花が>はナが強い」と答えている。また、⑭「夏が。」「胸が。」を〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(1回め)・〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(2回め)と発音したときには「(アクセントが)同じ」と発言した。

一部の実際の発音と少しずれた発言については、たとえば、⑨「橋が。」「夏が。」を〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(1回め)・〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(2回め)と発音したとき「(アクセントが)同じ」と発言した例や、⑮「首が。」「空が。」を〔○¹○¹▽〕〔○¹○¹▽〕(1・2回めとも)と発音したとき「<首が>はアクセントがない。<空が>はソが強い」と発言した例などがあるが、Iで述べたように、短文の単位で調査したときには、「橋が」はすべて○○¹▽型、

「夏が」は大部分が〇〇¹▽型, 「空が」は大部分が〇¹〇▽型に発音されているから, 上記のうち, 「橋が」の〔〇¹〇▽〕と「空が」の〔〇¹〇¹▽〕は話者の意識にのぼらぬ音相であって, 話者の意識としては, 「橋が」は〇〇¹▽型, 「空が」は〇¹〇▽型であるとみることもできよう。これは, ゆれがみられる語について, 話者の発言(型意識)を重くみることによってその型所属を決めうることを示唆するものであるが, 一方, 同一の語についての数多い発音例を求めることによって, 話者の発言(型意識)を無視しても, それぞれの語の発音傾向(どの型に発音されやすいか)を知りうる場合があることにも注目したい。

次に, B話者の場合は, 実際の発音では2語に一定の音相差が認められるのに, 話者がその区別を意識していない例がかなりみられる。

- ⑥「鼻が。」「夏が。」〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(1回め)・〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(2回め)／⑦「鼻が。」「空が。」〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(1回め)・〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(2回め)／⑨「橋が。」「夏が。」〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(1回め)・〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(2回め)／⑩「橋が。」「空が。」〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(1・2回めとも)／⑱「夏が。」「空が。」〔〇¹〇¹▽〕〔〇¹〇¹▽〕(1・2回めとも)

上記の発音の際に, 話者は, ⑦の場合は「2語の(アクセントの)区別の有無がわからない」, ⑥⑨⑩⑱の場合は「区別がない」と答えている。上記の語について, 短文の単位で発音したときの音相を表3でみると, 「鼻が」「橋が」「空が」の語には(一定の範囲を越える)ゆれが認められる。したがって2語の音相の違いを話者が意識しない理由がうなづけるわけであるが, 一方, 表2でみられるように, B話者は, ある組み合わせでは4回の発音を通して「鼻が」「橋が」を〇〇▽型に, 「空が」を〇¹〇▽型あるいは〇〇▽型に発音しており, 「夏が」は全発音例が〇〇¹▽型であるから, 上記の2語間の音相の区別が話者の意識と全く無関係とは言いきれないようにも思われる。

このような場合に, 話者の型意識を引き出すより有効な方法を開発する余地があるのかもしれないが, 一方, このように, 実際の発音では2語間に一定の音相差が認められるのに話者がその区別を意識していないという現象が, 他の話者についてもみられるか, 地域性はあるか, どういう地域に現われるか(無アクセントと多型アクセントが接する地域だけか, 体系の異なる多型アクセン

トどうしが接する地域ではどうか、多型アクセント地域の中心部では絶対にみられないのか、無アクセント地域ではどうか)といった問題もあり、今後の課題としたい。

三 ま と め

- (1) 調査語(を含む短文)を列記した調査票を読ませたときゆれがみられる語について、他の語(を含む短文)との「比較発音」により、安定した「型」を認めうることもある。
- (2) そのとき、ある語との「比較発音」では安定した「型」を認めえても、他の語との「比較発音」では、ゆれが生ずることがある。
- (3) したがって、無アクセントの周辺地域(曖昧アクセント地域)において、ゆれがみられる語について、「比較発音」により、ある程度安定した状態で「型」を引き出せることがあるが、語によっては、種々の語との「比較発音」をくりかえすことによって依然としてゆれが生ずる場合があることに注意したい。
- (4) 組み合わせの相手の語や発音順序を変え、発音回数を多くすることによって、それぞれの語のゆれの多少やゆれの傾向の違いを知ることができる。
- (5) 「比較発音」の際の2語のアクセントの異同についての話者の発言は、A話者は実際の発音にみられる型の異同と一致する場合がほとんどあるが、B話者には、実際の発音では2語のアクセントに一定の音相差が認められるとき、両者に区別がないと発言する例が多くみられた。

[付記]

これは、「都立大学方言学会」第124回研究会で発表した内容の一部です。その際、多くの方々から御意見をいただきました。あらためて御礼申し上げます。